ス あ、夢ってみなさん何語で見る？いつからか覚えてないんですけど、夢の中でフィリピンの人たちが日本語しゃべっているんですよね。

長 フィリピンの言葉。時々、日本語。

ユ 完全に日本語。

エ 日本語かもしれない。それか言葉なしで。見たら伝わるみたいな（笑）。

ユ 小学校5年生のときに初めて外国人の子がクラスに来たんです。それまで周りはみんな日本の幼稚園や保育園の出身で、同じ学年に外国人の子はいなかったし、なんとなく自分が他の子たちと違うなって気づいて、日本人になんなきゃ、って思っていた。

それでそのときに初めて来た外国人のその子と仲良くなって、いろいろポルトガル語で通訳して助けてあげたりした。ある日、先生に「ユカリさんはどっちで考えるの？」って言われて、そのとき答えにすごい迷ったんですよね。「え、わかんない」って。そこからすごい気になりだして、自分は頭の中でどっちで考えているんだろう、と。でもやっぱり日本語になりましたね。

—宿題はどうしてたんですか。一人でやっていたんですか？

ユ 一人でやっていました。2年生の途中から本読みの宿題があったんですけど、いつも面倒を見てくれていたおばさんに聞いてもらっていました。多分おばさんは何も意味はわからなかったと思うんだけど、聞いてあげるよって、ずっと付き合ってくれました。

国籍という壁を取ってみんなに平等の可能性を与えることが大事だと思うんです。

エベルトンさんの日本語

—エベルトンさんは小・中学校はブラジル人学校に通い、高校からは日本の学校に通ったということでしたが、日本語はどのように勉強していましたか？

エ 日本語は大体分かっていました。日本の幼稚園だったし、テレビを見ていたので日常的な言葉は特に問題はなかったです。ブラジル人学校には行っていたけれど、日本に残ることになったので、日本語能力試験合格を目標にしたんです。高校の頃には1級を持っていたので読み書きもできていました。ただ勉強の内容の理解が難しかったかなという感じでしたね。

周りと自分が違う

—ユカリさんがさっき「日本人にならなきゃと思った」と言っていましたけど、それはどういう感じですか？

ユ ときどき友達から「なんで違うの？」と聞かれたんですよね。「その給食セットなんか違うね」みたいな。確かランチョンマットじゃなくて、普通の100円ショップで売ってるハンカチを持っていったら、「それランチョンマットじゃないよ」と言われて。「あ、違うんだ」みたいな。みんながどこで買っているのか分からなくて、とりあえず親と行ったのが100円ショップだったんですよね。ちょっと大きめのハンカチがあるからそれでいいか、って。

エ 僕は逆で、生まれてから9歳まで日本にいて。幼稚園卒園して、2年間ぐらい家庭学習してから、ブラジル人学校に通いました。もちろん金髪の子もいるんですけど、自分と同じような日系の子もいて、これが普通かなと思っていたんです。だけどいざブラジルに帰ると、やっぱり自分は違うって思うようになって。

—ブラジルに帰ると違うように感じるとは、どういうことですか？

エ ブラジルだと日系の人が少なかった。自分では他の人と同じと思っているけど、何かのきっかけで自分たちが違うということを認識するわけじゃないですか。

一週間くらい前に記事で、とある黒人の子が自分が黒人だと認識した瞬間は差別されたときだった、と書いてあるのを読んだんですね。僕もそういうことがあって。親から「ブラジルで学校に入ると、アジア系の顔だからいじめられるかもしれない、見下されちゃうから気をつけなさい」って言われて、それで「あ、自分は違うんだな」と思ったんですよね。だから日本では「僕は違う」と思ったことがない。

—実際にブラジルで差別された経験はありますか？

エ ブラジルでは明らかな差別だったのかは分からないですけど、けんかしたがっている人は僕のところに来る、みたいな感じがあって、1、2回、椅子を投げたのを覚えている。負けてなかったんだけど、でもそれで逆にブラジルでは「自分は違う」って思った。先に日本語を覚えてからブラジルに行ったので、そういうとこもあったのかな。

エベルトンさん

複数の言語環境

—エベルトンさんは日本語、ポルトガル語、スペイン語がわかりますよね。皆さん言葉がごちゃごちゃにならないですか。

エ 母がスペイン語で話していたので、生まれたときはスペイン語が第一言語。それから日本語、ポルトガル語。案外ごちゃごちゃにならないです。

ユ 日本語とポルトガル語が文章の中で混ざることはないと思います。日本語ではわかるけど、ポルトガル語でなんだっけ、というのはあります。

エ あ、でも、ポルトガル語とスペイン語は混ざっちゃう、たまに（笑）。

ス フィリピンに行ったときフィリピン人に日本語で話しかけちゃう（笑）。

長 わかる。日本に住んでいるフィリピン人の友達に、まったく日本語が分からないんですけど、ついつい日本語で話しかけちゃう。それで気づいて、「ごめんごめん」って。

ス その「ごめん」も日本語（笑）。

全員 笑

ス 空港でも人とぶつかると「あ、ごめんなさい」とか。

エ 旅行先でブラジル人と知り合って、「あ、やった！ブラジル人だ！」と思って話しているとき「あ、ごめん」って言ったら「ごめんって何？」って言われて。それぐらい日本語が身についている。

長 あと聞き返すときの「え？」とかすごい真似されます。

エ あと「何ブツブツ言ってんの？」って言われる。独り言が多いから。もともと独り言って日本人は多いじゃないですか。

ユ ブラジル人で独り言を言うと変な人だと思われる。

エ そう、基本的にみんな言わない。言っても「あ～、やっちゃった」ぐらい。僕もたまに独り言を言うんですけど、ブラジルで独り言を言ったらちょっと危ない、変な人みたいに思われる。

親との関係

—小・中学校、高校生時代に親との関係はどうでしたか？

長 自分は最初中学校3年生のときに日本に来たんですけど、当時は「1年で帰るよ」って言われた。1年ならいいかって思っていたんですけど、その後高校に入るという話が出てきたんです。そのつもりもなかったので、ちょっとイライラして、親にも当たって。だったらずっと日本で暮らして勉強していれば良かったのに、とか。いろんな思いがあったんです。

でも実は母も学校の先生に相談していたんですよね。先生たちが声をかけてくれるようになって。「放課後の勉強どう？」とか、そういうサポートがありました。勉強は教えられないけど、裏では助けてくれたのかなと。おかげで無事に中学校を卒業できたので、親との関係性を崩さずに助けてもらったなって感じはしました。

—親が実は裏でいろいろ助けてくれていたのは最近知ったんですか？

長 社会人になる前に母と2人で飲んだんですよ（笑）。「実はね」みたいな。自分の周りはある程度大人だったので、特にいじめられることもなく、勉強だけでしたね。「勉強したいけど、やっぱり理解できない、どうしよう」って。

ス うちはそういうことはなかったですね。うちの母は今はフィリピンにいるんです。もう7年ぐらいは向こうにいる。「自分の人生だからどうぞお好きに」って感じ（笑）。

私が中学時代までは母も日本にいましたけど、母はやっぱり日本の教育が分からないから、って。

それでも三者面談は一緒に行くんです。でも母より私の方が日本語が上手になっちゃったんですよね。だからその三者面談も、先生の話を自分が親に通訳していたんですよ。良いところだけ（笑）。

全員 笑

エ あるある（笑）。

ス 都合の良いように通訳していたので（笑）、母は「あんただったらやれる」みたいな感じになった。そうやって育てられましたね。

あと高校入学の必要な書類などは全部父が用意してくれました。高校の三者面談も父に一緒に行ってもらいました。だから私は母よりも父に感謝しています。日本の父方の祖母や祖父にも。

—ユカリさんはどんな中・高生時代だったんですか？

外国にルーツを持つ子供たちにもいろんな選択肢がある浜松市になったらと良いなと思います。

ステラさん